

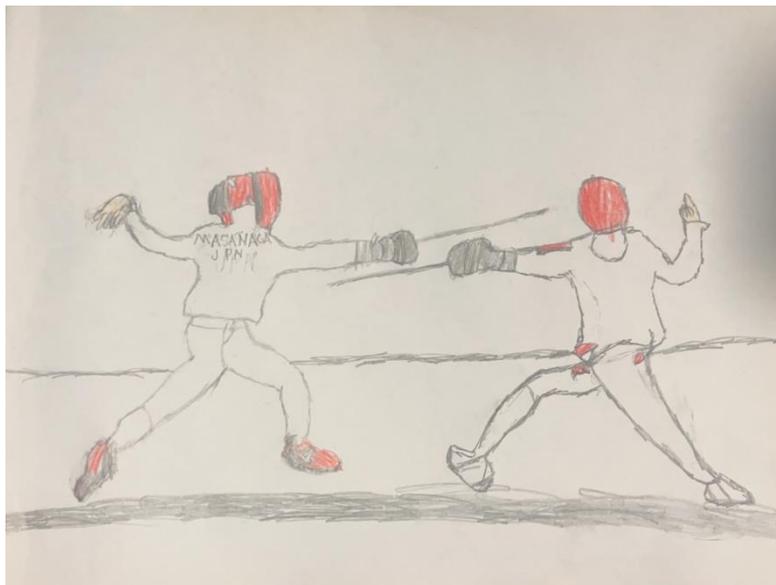
学生時代の経験を活かしてフィリピン・フェンシング界へ！
駐在生活を鮮やかに彩るライフワークに

正永 龍一郎



金メダルを獲得し笑
顔で表彰台に
立つ正永さん。

正永さんは日本企業の駐在員として2023年に来比。「せっかくフィリピンに来たんだし、現地の友人を増やしたい！」そう思って大学時代に励んだフェンシングをフィリピン人のコミュニティーの中で再開。今ではフィリピン国内大会で多くのメダルを獲得し、名前も知られるようになった。クラブチームでも大会でも日本人選手は正永さんひとり、爽やかなルックスも相まって目を引く。礼儀正しくフィリピン愛あふれる人柄からチームの仲間や大会で出会う選手からも慕われている。そんな正永さんにフェンシングの楽しさを聞きに編集委員が突撃した。



今回特別に **MJS 2年生の西田壮志くん**に挿絵を描いてもらいました。西田くんは校内に展示コーナーが設けられるほど高い画力で有名！真剣勝負の試合中に漂う迫力と躍動感を見事に表現してくれました。



目の丸を思わせる赤い面が正永さん(左)

「フィリピンでも子どもの選手層が厚くなってきているので、日本の子どもたちにも自分の記事を読んでもらえたら嬉しい」と、正永さん。



剣と剣がぶつかり合う、「キンッ。キンッ」という音が聞こえる。中世のヨーロッパでは、この音が響く中で命の奪い合いをしていたのだろうか。目を瞑って想像していると、近代的なブザーの鈍い音で目を開く。

フェンシングというスポーツは誰もが聞いたことがあるだろう。しかし、深く知っている方は少ない

いかかもしれない。フェンシングはフランスで発祥した剣技で、選手二人が向かい合い、片手に剣をもち、互いの体を突いて勝敗を決めるスポーツだ。1896年の第1回五輪（アテネ）以来、欠かすことなく採用されてきている。

2024年、フェンシング発祥のフランスで五輪が開催され、日本はメダルを量産。

ケソンの小さなビルの一室でフィリピン人と共に汗を流す正永さんに話を聞いた。



数々のスポーツを経てフェンシングへ

「スポーツは音痴の割に好きで、中学ではテニス。高校でボクシングをやり、そのおかげで運動能力が著しく向上しました。ちなみに、ボクシングは運動神経を鍛えるにはかなりオススメだと思います。」

「当時、サッカーや野球が人気で、レギュラーになるのも難しく、それらの競技の中では、自分の強みを出せないと考えていました。大学の新人歓迎会で、たまたま先輩に誘われ、やってみたフェンシングが意外と面白かったです。ボクシングでの経験が活かそうでしたし、尚且つ勝てるかもしれないと思い、フェンシングを始めました。」

そんな思いで始めたフェンシングでしたが、大学時代の最後のリーグ戦では惜しくも2位。優勝できなかった悔しさから大学卒業以来少し距離をおいていたが、思わぬ動機で再び始めることに。

「駐在員として来比した当初から、日本人が集まるどころではなく、異国の地で地元の人と仲良くなり、地元コミュニティーへ入り込みたいと考えていました。そんな時にフェンシングで検索したら、たまたま今のクラブ“**Republic Fencing**”を見つけたんです。地元の方々とコミュニケーションを取ることができ、過去の経験が活かせる。そしてあわよくばビジネスにつながらないか(笑)と考えて参加を決めました。」

現在、来比と共にフェンシングを再開し、1年経ったところだそうです。



フェンシングが生み出す「楽しさ」とは

「言葉にするのは難しいですが、決闘やタイマンのイメージ…少年の心をくすぐる1対1で剣を持つての戦い。誰かのおかげで勝つのではなく、自分の力だけで勝つ。剣を持つて戦うのは侍みたいでカッコいい。同時に、剣で相手を突くとビープ音になるゲーム要素もある。ボクシングとステップが似ていて、自らリズムを刻みながらステップし、攻撃する。自分の中で、多少のセンスを感じたことも大きかったです。」

「また交流の輪が広がり、友達が増えました。これまで日本人が開拓してこなかったコミュニティに足を踏み入れることができ、他の日本人とは少し違った経験ができていると感じています。」

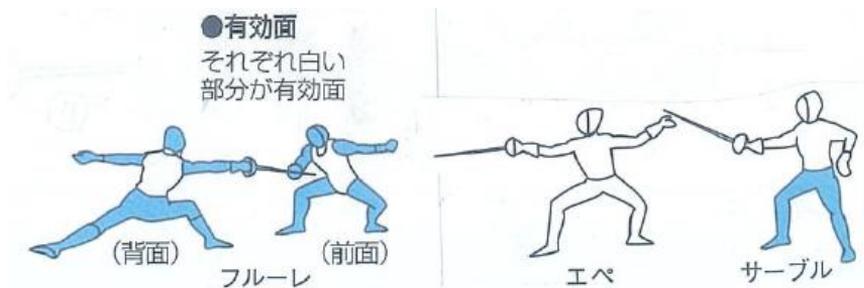
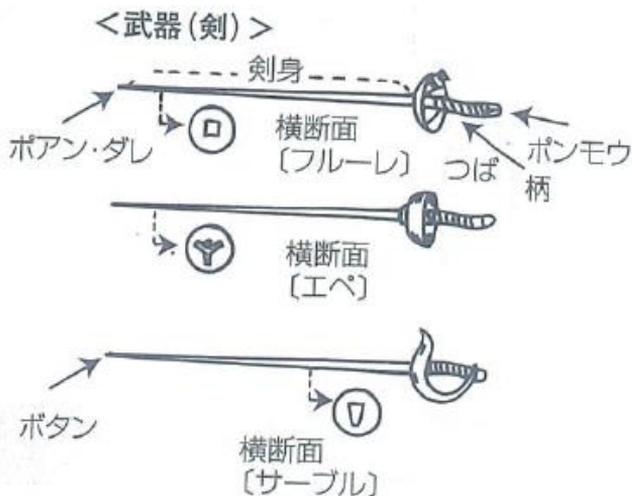


(クラブでのトレーニングでは実践も行う。左が正永さん)

まずはココから！フェンシングルール

フェンシングは陸上や競泳とともに第1回五輪からずっと競技に選ばれています。剣での戦いをスポーツ化して現代に残ってきた歴史あるスポーツでもあります。

フェンシングは2人の選手が剣を持って、互いに相手の体を突いて勝敗を決めるスポーツです。剣は「フルーレ」「エペ」「サーブル」と3種類。それぞれ特徴があり各種目名にもなっています。



フランス発祥の影響からか、競技中はフランス語の用語が用いら

れます。正永さんはエペの選手。エペの基本ルールは単純明快。全身すべてが有効面で、先に突いた方にポイントが入り、両者同時に突いた場合は双方のポイントとなります。ポイントは「電気審判機」が判定します。剣の先端に内蔵されたスイッチが相手の有効面に触れるとセンサーが反応する仕組みになっています。

日本男子代表の五輪成績をみると、1952年に初出場。2004年のアテネ五輪まで予選落ちがほとんどで、最高で4位でした。2008年の北京五輪で太田雄貴選手(フルーレ)が日本史上初となる銀メダルを獲得。2012年のロンドン五輪のフルーレ団体で銀。2021年の東京五輪では、予選落ちの選手はおらず、エペ団体では念願の金に輝きました。今年のパリ五輪では、皆さんご存知の通り、それを超える快進撃をみせてくれました。

- ・男子エペ個人 加納虹輝選手 金メダル(初の個人金メダル)
- ・男子エペ団体 銀メダル
- ・女子フルーレ団体 銅メダル
- ・女子サーブル団体 銅メダル
- ・男子フルーレ団体 金メダル(初の団体金メダル)

正永さんによると、背が高い人がリーチも長く、有利であるが、日本の最強選手は175cm程度とのこと。昨今は科学の発達によりトレーニングを最適化することができるようになり、欧米人に対抗できるようになってきたと分析してくれました。フェンシングは、最新の科学や分析を活用したトレーニングが取り入れやすいようで、そのおかげで日本も世界レベルに成長してきているそうです。

正永さんってこんな人！

175cm 68kg
足のサイズ 26.5cm

八王子市出身

ニックネーム
クヤ・リュウ

フィリピンの国民性が大好き！
小さな事でもすごく褒め合うので
気持ちが前向きになります

実は人見知り（編・全
く見えない!）

好きなフィリピン料理は
ブラロ（牛骨スープ）

子どもの頃は喘息持ちで病気が
ちだったけれど、小4で始めた水泳
のおかげで、色んなスポーツに
チャレンジするようになりました

小1～小4までミャンマーに
住んでいました

フェンシングの試合はだ
いたい月に2回！お祭り
みたいな感覚で楽しみながら
参加しています！

スイッチの付いた剣を繋ぐ
コードはユニフォームの中
を通して審判機に接続する





発展途上！フィリピンのフェンシング

日本ではトップアスリートの活躍もあって認知度も高いが、フィリピンのフェンシング事情はどうなのでしょう？

「レベルはまだまだこれからですね。コーチも練習途中で携帯ゲームをするなど、給料の問題もあると思いますが教える側の意識が追いついていない状況も見受けられます。フェンシングが知られていないわけではないのですが、ルールなどの詳しい内容を知らない人が多いかもしれないですね。」

「一方では、英才教育化が進んでいる様子もうかがえ、幼少期から始める選手も増えてきているようです。日本では3-4歳から始める子どもがいますが、フィリピンでもそうした状況がちらほら見られるようになっていきます。10年後くらいには盛んになっているかもしれないですね。大変楽しみです。」

フィリピンは韓国の影響も大きく受けており、フェンシングを題材にした韓国ドラマ「二十五、二十一」で認知度が上がっているようで、その影響もあるのか、女性の参加者も多く見受けられるようになったそうです。<https://www.netflix.com/jp/title/81517168>

「大会数は意外にも日本より多くて、練習に試合にと忙しい日々を送っています。日本ではメダルをもらう機会に恵まれませんが、フィリピンでは多くのチャンスがあります。なるべく試合に出場することで、フィリピンの競技レベルに良い影響を与えられたらと思っています。ち

なみに賞金も出ますが参加費が回収できるかな？というくらいの額です(笑)。今後賞金が増えれば大会への参加者も増加し、フェンシング業界の活性化につながるのではないのでしょうか。」

パリ五輪でのフィリピン・フェンシング

今年のパリ五輪には1992年以来、約30年ぶりにフィリピン代表として女子フルーレ個人でサマンサ・カタンタン選手が出場。ブラジル選手相手に1勝をもぎ取り、ベスト32位で大会を終えた。

フィリピン代表は2019年の東南アジア競技大会(SEA GAMES)でも2つの金メダルを持ち帰り、成長の一旦をみせている。



今後の目標は

「いつか自分のフェンシングスクールが持てたらいいなと思います。日本ではすでに鍛錬する環境が整っているのですが、自分からやる必要はあまり感じませんでしたが、フィリピンのような国であれば何かできるかもしれません。教えるのは苦手なので、(仕事の経験を活かし)経営側に回るかも(笑)。いつかフィリピンに腰を据えて、教えるのも悪くないと思い始めています。フィリピンの魅力は何でも受け入れてくれ、堅苦しさがないところ。先進国のスポーツにおいて自分ができることは少ないと思いますが、フィリピンのような成長途上の国なら、自分がやることで、思い入れの深いフェンシングで何か付加価値がつけられるのではないかと、思っています。」

ーインタビューを終えて(編集委員 N)ー

取材当日は首都圏ケソン市のビルの屋上にあるトレーニング・ジムで、男女含めて 20 人ほどが参加していました。年齢層も小学生から大学、社会人と幅広い。冷房は効いているものの、気温が 30 度をなかなか下回らないフィリピンで、防具や面を付けて剣を振るう姿は少し見慣れない気がしました。話を聞くと、奨学金を目標にフェンシングを始めた子どもや姉の影響を受けて始めた高校生らがあり、見ている側の気持ちさがスッキリするほどの汗を流しながら、練習や模擬試合を楽しんでいたのが印象的でした。

Republic Fencing 問い合わせ

●Instagram @republicfencing ●mail admin@republicfencing.com



MJS 2年生の西田壮志くん・画

試合観戦記 7月28日(日)

Southeast Asia-Pacific International Fencing Competition

(@1F Ayala Mall Manila Bay, Pasay City)

7月22日(月)から30日(火)まで種目、男女を替え、行われたこの試合。モールの1Fということもあり、一般のお客さんも足を止めて注目していました。編集委員Wはエペのシニア男子の試合を観戦。フィリピン人の中に正永さん1名が日本人として参加。予選5試合を戦い、4勝1敗で決勝トーナメントに勝ち上がっていました。予選は、3分1セットで、5ポイント先取で勝利となりますが、一旦、リードされると、同時に突いた際、両方にポイントが入るケースもあるので、本当に逆転するのが難しい厳しい試合だと感じました。

決勝トーナメントには58名が参加。3分×3セットで、15ポイント先取で勝利。正永さんは、1回戦はシードで、2回戦から出場。勝利するも15-10と接戦でした。続く準々決勝では成長著しい若手選手に惜敗。レベルの高い大会でした。正永さんの結果は全体の7位。手に汗握る好ゲームを繰り広げられ、1ポイント毎に声を出し、集中力を高めながら試合されているのが印象的でした。

試合結果は、<https://www.fencingtimelive.com/> で確認できます。世界で行われている公式戦の状況が全て閲覧出来るのは、今の時代らしい、と思いました。



2回戦 15ポイント目の突きを決める正永さん(右)